プログラミング教室が盛況

20年度、小学校で必修化　論理的思考育む機会にも

生活調べ隊

コンピューターのプログラミングを、子どもが楽しみながら学ぶ民間の教室が増えている。2020年度には、小学校で必修化される予定で、今後、民間の教室もさらに増えそうだ。創造力や論理的な思考力などを育むことが期待されている。（小野仁）

子どもたちが学ぶプログラミング教室。パソコン画面の右側に棒型のブロックを並べ、左側のキャラクターの動きを指示する（東京都渋谷区のシーエーテックキッズで）

9月下旬の週末。東京・渋谷駅の駅ビルの一室で小学生約60人が、パソコンの画面を真剣に見ながら、マウスを動かしていた。1、2年生が取り組むのは、初心者向けプログラミングだ。

小学2年の女児(8)が作っていたのは、雲にいるサルをオウムが助けるというコンピューターゲーム。「x座標を10ずつ変える」「～まで待つ」などと書かれたブロックをパソコン画面上で並べて、サルやオウムの動きを決める。

プログラミングとは、コンピューターに対して、人間の意図通りに動作するように命令すること。英語をもとにした専用言語で命令するものが多く、そのための専門家がいる。

しかし、近年は、ブロックを並べたり、絵を描いたりして命令することができるようになり、初心者でも気軽にできるようになってきた。

この教室は、教育企業「シーエーテックキッズ」（東京）が2013年から展開しているもので、小学生を対象に東京や大阪、福岡など全国8か所に教室がある。

女児は、7月からこの教室に通い始めた。「キャラクターを選んだり、大きさを変えたり、自分の好みで作るのが楽しい」と話す。母親(48)は「IT（情報技術）の分野に進んでほしいというわけではないが、将来何かの役に立てばいい。習い事の一つです」と話す。

本格的なプログラミングを学ぶ中高生もいる。教育企業「ライフイズテック」（東京）の教室に通う千葉県浦安市の中学3年、長滝谷晋司さん(14)は、自閉症で言葉のコミュニケーションが難しい人たちのためのアプリを今年6月に開発し、ソフトの配信サイトに公開した。自閉症の人が意思を伝えるために使う「絵カード」をタブレット上に表示できるようにした。母親の友人に自閉症の人がいて、絵カードを持ち歩く不便を解消できればと考えたという。長滝谷さんは、「人の役に立つものができることにやりがいを感じる」と話す。

小中高生を中心にしたプログラミングの教室を開く企業・団体は全国で40以上ある。東京など大都市が中心だが、地方でスクールを運営するところもある。アイルランドに本部がある非営利団体が展開する「コーダー道場」は、7～17歳を対象にプログラミングを無料で学べる教室で、東京、大阪、奈良など日本に約50か所。ボランティアが自主的に運営している。

発表の場も増えている。角川アスキー総合研究所などは、今年初めて、プログラミングの小中学生向け全国大会を開催した。発表の場を作ることで、関心を高めるのが狙いだ。

国も今後、プログラミング教育に力を入れる方針で、2020年度に小学校で必修化する方針だ。ただ、教育現場ではプログラミングを教えるノウハウがないため、民間の企業や団体などとの連携が課題になりそうだ。

NPO法人CAN（キャン）VAS（バス）（東京）は、これまでに約120の自治体や学校、団体と連携して、指導者研修やワークショップなどを行ってきた。同団体理事長で、慶応大学准教授の石戸奈々子さんは、「プログラミングを学ぶというより、試行錯誤しながら新しいものを作り出す力や論理的な思考などを学んだり身に付けたりすることが大切」と話す。

青山学院大学客員教授（プログラミング教育）の阿部和広さんは、「子どもは、遊びの感覚でプログラミングに興味を持つ。楽しく遊びながら、結果的に学べるという雰囲気作りが大切だ」と話す。

右ページに関連記事▶▶▶